

新型コロナウイルス禍とやまゆり園事件

4年前の7月にやまゆり園事件を引き起こした植松聖の裁判が今年1月から始まり、3月に死刑の判決、その後担当弁護士が控訴したものの植松自身が控訴を取り下げ、死刑が確定した。4月7日には横浜から東京拘置所に移送されたという(4/8付、雑誌「創」編集長篠田博之氏のYahoo! ニュースへの投稿より)。これで家族以外ほぼ誰とも会うことができなくなり死刑の執行を待つだけとなった。死刑執行は法務大臣の判断に。執行されると特異な主張のもとに実行された凄惨な事件の解明がこれ以上できなくなる。障害者は役に立たないから殺したほうが良いという考えが間違っている事を植松聖に理解させ、自分のやったことの反省からその償いのために生涯をかけて生きて行く道もあったはずなのに。人を生産性で判断する考えと、さらにはそのような人を区別する事をあたかも正しいことかのように口にし差別を助長する「匿名」の一群の人たちの考えに終止符を打つことなしにやまゆり園事件を乗り越えることはできない。NPO法人抱樸の理事長奥田知志氏は「植松君は「意味のある命」と「そうでない命」と命に分断線を引き、意味のない自分を意味あるものにするため障害者の抹殺を考えた。だから私たちは意味のない命なんてない、生きてていいんだ、命こそ大事なんだと言い切らねばならないし、植松君にも君も意味があるんだと言ってやりたい。・・・。」と語っている。「植松君は真顔で「障害者は不幸だ、と言ったが、私たちはこれに答えてない、「生きてることが幸せなんだ」と彼の問いに真顔で答えねばならない」とも。その通りだと思ふ。だからこの事件の解決は死刑の執行ではなく、あくまでも植松聖に間違った考えを改めてもらうことでなければならない。社会に蔓延する生産性優先の考え方を終わらせることでなければならない。だからあえて言わせてもらうが死刑にするべきではないと思う。家族を失った遺族の極刑を望む気持ちは理解するが、世間の非情な見方から身を守るため匿名という方法を選ばざるを得なかった事を解消するためにも。死刑ではなく植松聖ととことん向き合い続けていくしかないと思う。(この国の法制度では扱いきれない問題は法制度を改善するための必要な措置を取ればいいのであり)植松聖ともっともとりとする場を継続する必要があると思う。死刑執行で一件落着とすることではない。

このことと新型コロナウイルス感染がなんの関係が。新型コロナウイルスだけでなく9年前の東日本大震災、もつとさかのぼれば25年前の阪神淡路大震災につながることに感じている。なにが?どれもこの国のあり方を捉え直すきっかけになった出来事、今の社会のあり方ではこの先に進めないと感じた出来事。阪神淡路大震災では、ビルが横倒しになり、高速道路の高架が崩れ落ちた。六千人を超える死者、でも全国から人が集まった。ボランティア元年と言われた。東日本大震災では津波のすざましき、自然災害の破壊力に打ちひしがれそうになったが、全国からの支援があった。原発事故という起こってはならない人災まで引き起こしたが、それでも生きていくことこそ一番尊いという事を実感した。命こそ尊ばれねばならない事を。そしてコロナ。私たちはお金でもモノでもましてやマスクや消毒液ではなく一番大事なものは人と人の支え合いだという事を改めて確認できた。今の

世界中の社会の仕組みを切り替えなければならない事を知った。私たちは国や都市や地域や
集団のためではなく、人のために生きることしかできないという事も。

福祉の現場にあって、福祉を仕事として生活をしていて、生活のための福祉の仕事ではなく、人
と人が人として人であるための仕事の一つが福祉なんだということに気がついた。私（たち）は
そんな“ふくし”の仕事をつづけていきたい。